

1. 発掘調査の目的

南波渡場は、名古屋城本丸^{からめてうまだし}搦手馬出と二之丸の間の堀の北端に位置します。当地点では以前から水堀に面した石組が露出しており、水堀と空堀を仕切る構造物があることが知られていました※1。遺構の性格や残存状況を確認することを目的に発掘調査を行いました。

また、築城時に描かれた石垣普請の計画図^{ちょうばわりず}（丁場割図）には、現在の南波渡場よりも約10m南側の地点に「堀ノ志きり（仕切り）」と記されています。

築城当初は南波渡場の位置が異なっていたことも考えられたため、遺構の有無を確認しました。

※1 現在、発掘調査に伴い水堀の水位を下けているため周辺は陸地となっています。

2. 名古屋城水堀と船着場「南波渡場」について

名古屋城の水堀は、城の普請が開始された慶長15年(1610年)に石垣や堀などと同時に完成したと考えられています。広大な面積を持つ水堀は、城内への侵入を防ぐ防御施設であるほか、遊興の空間として、藩主の移動経路としてなど多面的な機能を持っていました。

水堀に舟を運航する際の本丸・二之丸側にある唯一の波止場が「南波渡場」で、南波渡場から外堀を挟んだ北側に「北波渡場」や「御船蔵」等がありました。

南波渡場は、日常的には藩主や家族らが下御深井御庭（現在の名城公園）へ移動する際に使われたと考えられます。

3. 発掘調査でわかったこと

以前から確認されていた石組（石列④）より南側に石列①～③が新たに発見されました。また、石列④の下段に木杭3本と板1枚が確認され、石列④北辺を水堀と空堀の境と認識していた時期があったことが明らかになりました。

特に石列③は、石列④と併せて階段状構造で、石列の下には共通して^{れき}礫敷きが認められることから南波渡場の一連の構造物と考えられます。この礫は石列④下段の石組の隙間や石列④の南側の水堀底面にも広がり、

- (1)石組の基礎部分（裏込め）である可能性
- (2)石組に先行して外堀に向かう礫敷きのスロープ構造があった可能性

等が考えられます。

石列①～③には段状の高低差は認められず、石列①・②は、石列③・④とは別の機能を果たしていたかもしれません。

また、丁場割図の「堀の仕切り」に該当する可能性のある石組は、今回の調査では検出されませんでした。

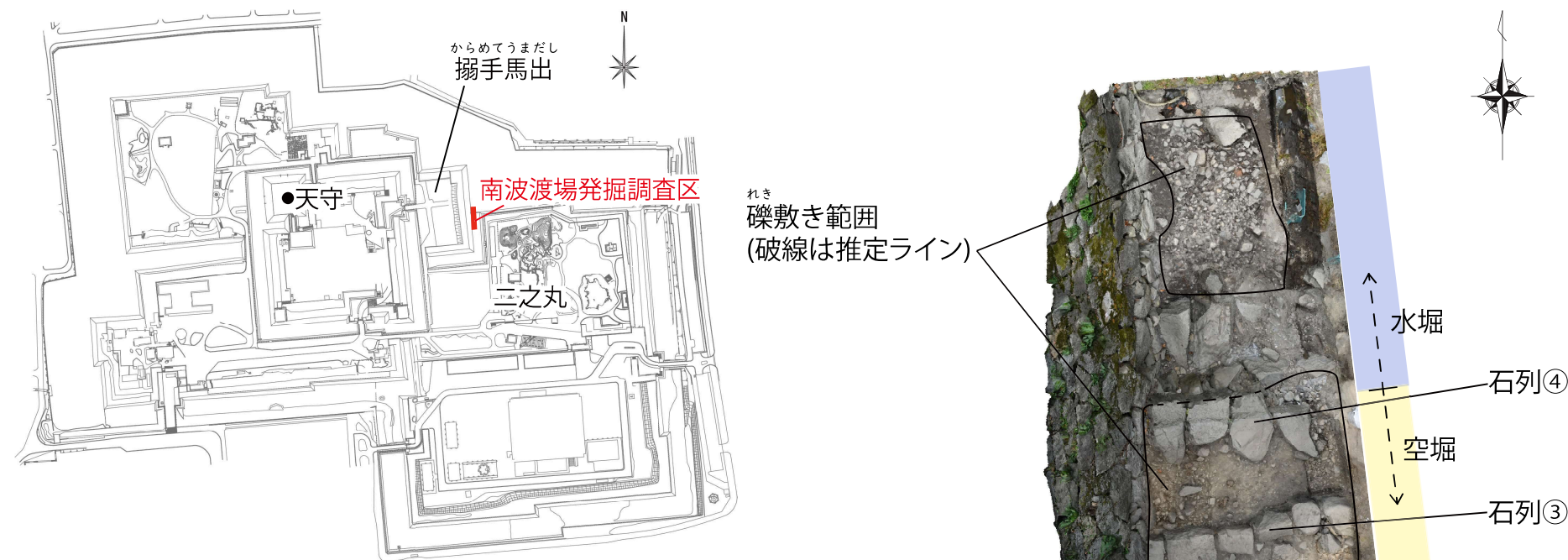


図1 名古屋城全体図

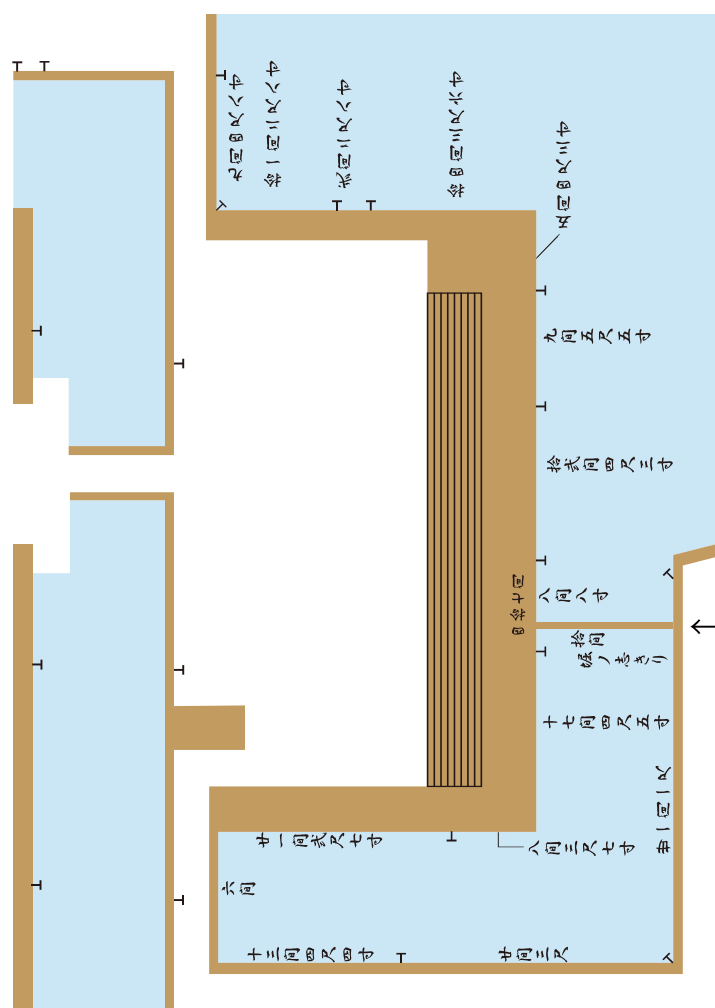


図2 丁場割図(搦手馬出周辺拡大)
 (「名古屋御城石垣絵図」(靖國神社遊就館蔵)をトレース)

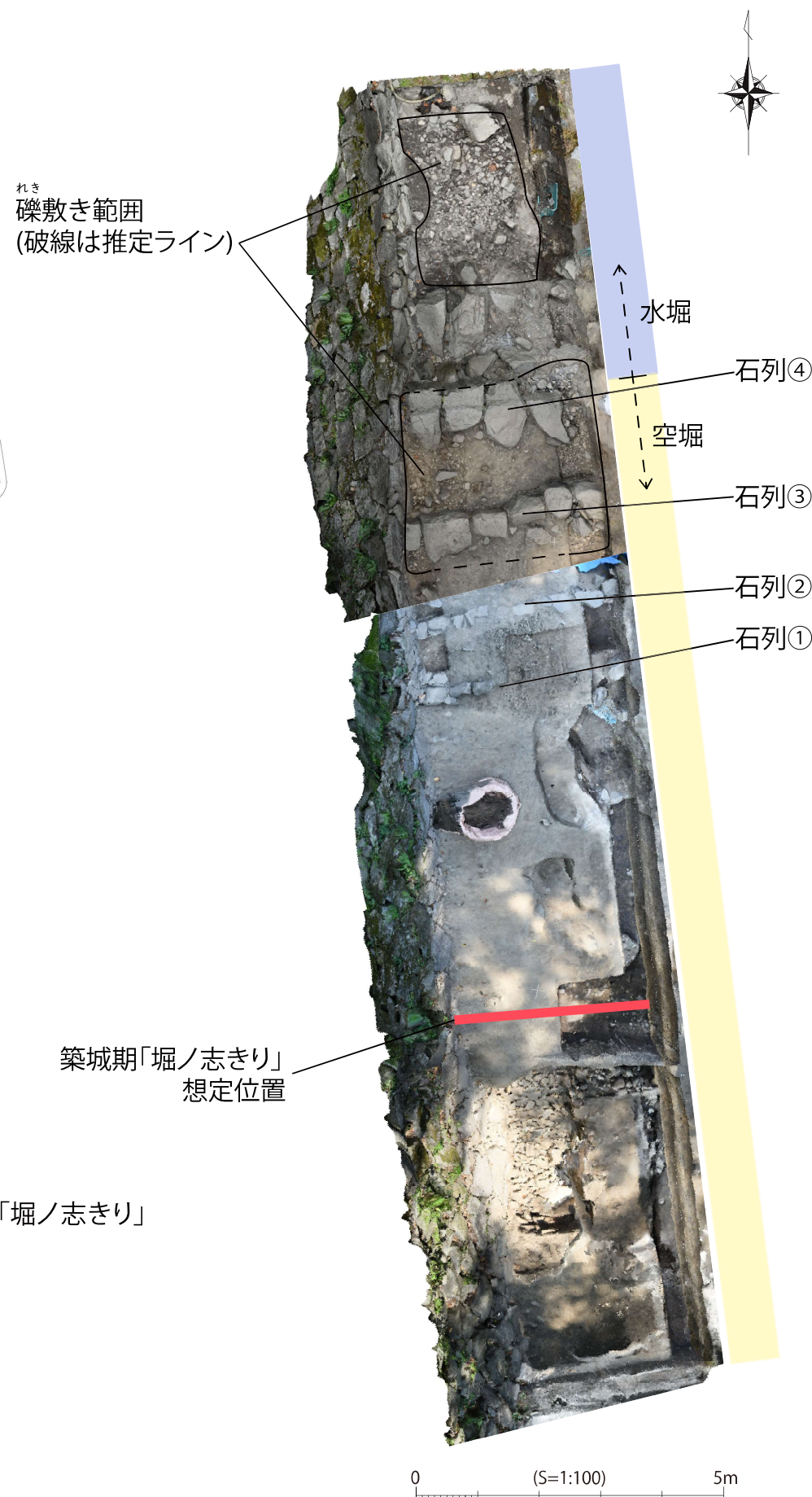


図3 調査区平面図